

“Dark Phantoms in the Wind”

—— J.R.R. トールキンの研究業績における〈フィロロジ〉と〈文学研究〉の諸相

岡 本 広 毅

1. はじめに

一般に、J. R. R. Tolkien（トールキン）は、*The Hobbit*（『ホビット』）や *The Lord of the Rings*（『指輪物語』）を代表とするファンタジー作家として知られている。その反面、彼が実はオックスフォード英文科の創成期に活躍した研究者であったことはそれほど認知されていない。ノーマン・カンターはこのことをやや誇張気味に評し、99.9%の人々は、トールキンの学術業績に接したことがないと言うが、これは強ち間違っていないだろう（*Inventing the Middle Ages* 207）。トールキンの実像とは、オックスフォード大学教授という肩書を持つ英語英文学研究の大家であり、何よりも自分自身の職業を“philologist”「フィロロジスト」としていた。¹ トールキンにとってフィロロジとは、“foundation of humane letters”（*The Monsters and the Critics* 225）「人文学の土台」であり、研究人生の原点のみならず後の創作物語を生み出すインスピレーションの源泉ともなった。だからこそ、彼は日に日に増していくフィロロジへの不当な風当たりを感じていたのである。以下は、1923年に *The Year's Work of English Studies* に寄稿した論文“Philology: General Works”の中に記されている一節である。

The philological instinct is, none the less, as universal as is the use of language, and it cannot be excluded from operation in the general province of English letters without grave detriment to these studies. Separatist ideas, it is true, have not been either preached or acted upon by philologist; but, we think, even today, in the present condition of the atmosphere (stormy and unclear, with not a few dark phantoms in the wind), may read with profit Professor R. W. Chamber's inaugural lecture. (Tolkien 36-37)

「フィロロジカルな本能」とは言語使用と同じく“universal”であるとした上で、当時の英文科の状況に触れている。「フィロロジーの排除は英文学にとって重大な損害となる」——トールキンは何より人々が〈フィロロジー〉と〈文学〉を切り分けて考える当時の風潮に強い違和感を覚えていた。その状況は、“stormy and unclear, with not a few dark phantoms in the wind”というトールキンらしい表現で綴られている。同様の見解は1925年、リーズ大学からオックスフォード大学の教授職を志願する際に書かれた応募書簡においても見られる。ここには、〈言語〉と〈文学〉研究の融合的発展を願う強い意思が、“the growing neighbourliness of linguistic and literary studies”の推進という言葉で表明されている。なぜなら、“which can never be enemies except by misunderstanding or without loss to both” (*The Letters of J.R.R. Tolkien* 13)「分断は双方にとって不利益にしかならない」からである。〈言語研究〉と〈文学研究〉は、あくまでも敵対することのない隣人関係にあることが確認されている。

トールキンの一連の見解は、当時の英文学研究の中に存在した学問上の溝を映し出している。一方で、彼のフィロロジーへの眼差しは、ここ数年の“Return to Philology”「文献学への回帰」の気運において、有用な視座を提供するものと思われる。文学アプローチの理論・方法論の慣習化・特殊化に対しては早くから警鐘が鳴らされてきたが、その一人、ポール・ド・マンも“The Return to Philology”の中で、精読のもつ転覆性や有用性を強調し、文学研究からフィロロジーや修辞学を分離することの弊害を論じている。² またポストコロニアリズムの旗手エドワード・サイードも、これまでの人文学研究への取り組みの根底に自身が“philological”と呼ぶものが存在し、それは“a detailed, patient scrutiny of and a lifelong attentiveness to the words and rhetorics” (61)であったと述べている。文学・文化批評理論の先導者として見做されることの多い碩学によるフィロロジーの再評価は、トールキンの信念の一角に触れる思いがす

る。何より、一連の英文学研究の歴史を振り返ることは、今日頻繁に取り沙汰される英文学研究存続の危機や揺らぎが今に始まったことではないことを伝え、ディシプリンのアイデンティティ模索に奔走した先駆者の思想や葛藤に触れることにより、今後の問題解決への糸口を与えてくれることだろう。本稿では、英文学研究の黎明期に生起していた〈フィロロジー〉と〈文学研究〉のある種のせめぎ合いを概観し、それがトールキンの主に初期の学術論文・業績の中にどのように反映されているかを見ていく。特に、後半ではトールキンのチョーサー論“Chaucer as a Philologist”に焦点を絞り、これまで検討されていないこの論考の意義を学術的文脈の中で再考することとする。

2. 英文学研究の勃興とフィロロジーの衰退

英文学研究を巡る制度史の検討はますます進展し、文学研究の勃興を巡る歴史的背景や知の権力構造が白日の下に晒されつつある。英文学教育の意義はイングランドよりも早くスコットランドやインドといった地域で高まり、それが逆輸入されて19世紀中盤、ロンドン大学を中心とした大学教育において正式な科目となった。³ 長らくギリシャ・ラテンの古典語研究の牙城であった「オックスブリッジ」を突き崩すにはさらなる年月を必要とし、オックスフォードでは“Merton Professorship of English Language and Literature”設立を契機とする1885年（学位コースは1893年）、やや遅れてケンブリッジでは、1917に英文学の専攻コースができ、学位授与のための授業として設置された。英文科設立の背後には、知性・感受性の涵養、階級間の統合、そして国民意識の高揚などの多くの動因があったこと、とりわけ、ケンブリッジではI. A. リチャーズ（1893-1979）やF. R. リーヴィス（1895-1978）らの決定的な活躍が指摘される。⁴ 国家的支援の下、社会的使命を担う科目として台頭した英文学研究は、時に「立身出世譚」に準えられることがある。というのも、英文学の研究など“no more than idle gossip about literary taste”（Eagleton 125）に過ぎず、当初は嘲笑を免れないほど価値の低いものとして見做されていたためだ。Terry Eagleton は、英文学研究に対する見方が変化した時期を1920年代から30年代とし、そこに急激な価値観の変動を見ている。

In the early 1920s it was desperately unclear why English was worth studying at all; by the early 1930s it had become a question of why it was

worth wasting your time on anything else. English was not only a subject worth studying, but *the* supremely civilizing pursuit, the spiritual essence of the social formation. (Eagleton 27)

イーグルトンによれば、この10年間は英文学に対する認識が劇的に様変わりした時期であり、「無価値なもの」から「最上のもの」へと真逆の変貌を遂げたわけである。

とはいえ、英文学研究の大学への参入を巡っては、多くの賛否両論が巻き起こり、種々の意見や葛藤、せめぎ合いが存在していたことは想像に難くない。例えば、「ヴァナキュラーな」英語で書かれた文学などは大学教育の対象とはならず、特に“taste”に関わることは判断基準が曖昧ゆえに、詰め込み暗記型の教育に陥るのではないかという懸念があった。他方、性格や道徳、倫理観の向上を目指す文学の志向性を教えることは無理難題であり、それゆえ厳格さや専門性が求められる「ディシプリンとしての正当性」に欠けるというような意見も見られた (Atherton 224)。⁵このような事情を踏まえると、当初の英文学が古典語研究やフィロロジーといった権威ある後ろ盾を必要とし、ディシプリン確立に腐心していたことは不思議ではない (Atherton 233)。特に Bruce McComiskey が述べているように、今から約100年前、すなわち20世紀初頭の英文学研究は、ヨーロッパないしアメリカにおいて「フィロロジー」とほぼ同義であったのだ (10)。⁶にもかかわらず、昨今の制度史再考の言説においては、フィロロジーと英文学研究の両者に共通する部分よりも、いかに後者が前者から脱皮・脱却し成立したかということが過度に強調されているように思われる。⁷

第一次世界大戦後、1921年にイギリス政府により母国語教育の実情を調査するための委員会が設置され、英文学を学校教育のカリキュラムの軸として正式に採用する報告書、いわゆる「ニューボルト・リポート」(委員長を務めた詩人ヘンリー・ニューボルトの名に由来) が作成された。この報告書において、高等教育における比重が古典語研究から母国語研究へと移行し、英文学は国民・国家統合のための象徴的科目となったのである。その一方で、この報告書に見られるフィロロジー関連の事項はあまり取り上げられることがない。もちろん、母語としての英語・英文学教育の重要性を説いた本報告書の意義は計り知れないが、この中で「フィロロジー」という言葉が40回以上も用いられ、「言語／フィロロジー」研究の意味と役割が説明されていることは見逃してはならない

だろう。当時、フィロロジ研究は古英語・中英語研究と深く関連付けられていた。そこには「アングロ・サクソン語をはじめとする先人の文学を蔑ろにすることは間違っている」というフィロロジ側への配慮も見られる。

In saying this we must not be understood to undervalue Anglo-Saxon or in any way to discourage its study. On the contrary we believe that if the study of Anglo-Saxon and Middle English is in future pursued on the broad and humane lines which we have suggested above, it will, whether compulsory or not, attract an increasing number of students by its intrinsic interest and importance. Anglo-Saxon is the chief key to our knowledge of English life and ideas for a period of some five hundred years. (Board of Education 227-28)

アングロ・サクソン語や中英語研究が今後、“the broad and humane lines”「広く人文学に関する事柄の追求」となるのであれば、学生を引き付ける魅力的な科目となりうる。つまり、中世の作品は、その本質的価値は認められているが、現状のアプローチの方法に問題があるわけである。事実、アングロ・サクソン語（古英語）の研究史を振り返る際には、古い言語研究の目的はあくまでも宗教や法律、歴史への関心に由来していたことが確認され（214-15）、その関心の動機づけはあくまでも言語ではなかったことが強調されている。⁸アングロ・サクソン語の研究は断続的ではあったにしろ、これまで宗教・文学・歴史的事柄に緊密に関連し研究が行われてきた、というわけである。それにも関わらず、その後、19世紀になってドイツ流のフィロロジが猛威を振るい、教育上の考え方や方法論に影響を支えた、その結果、〈文学／歴史〉から切り離し、言語の形態や音声の分析に集中することにより一層科学的様相を帯びてきた。こうした経緯から、当時フィロロジとは、とりわけ次のような研究領域と結びつけられていたことが窺える。

But just because philology—investigating sound-shiftings, changes in the form of words, variations of dialect, and the inter-relation of languages—is a science, we are of opinion that in this abstract and rigorous form it should be a separate study, which should be predominantly post-graduate. (Board of Education 216)

音韻変化、語形変化、方言のヴァリエーション、諸言語間の関連性——これらがフィロロジの中樞を占める要素であり、総じて言語に特化した“abstract and rigorous”な学究的営みを特徴とするため、文学研究とは切り離されるべきであったことが窺える。

時代を前後するが、フィロロジー色の濃い英文学研究の設立に対して、強硬に反対した人物の一人に John Churton Collins（ジョン・チャートン・コリンズ）がいる。彼は言語的側面に特化したフィロロジーを土台とする文学研究の有り方を批判し、ギリシヤ・ラテンの古典研究、あるいはイタリア、フランス文学との相互乗り入れによってのみ英文学研究はディシプリンとして成立することを主張していた。⁹ コリンズはフィロロジーそのものを過小評価しているわけではないが、学生への教育的な観点から文学との混同と併存を断固拒否している。何よりフィロロジーは本来、科学に分類されるべき分野であり、“an instrument of culture”「教養を育む手段」としては極めて下位に位置し、“taste”の涵養には全く寄与しないと断言している（65）。一連の批判を濃縮した極めつけが以下の言葉である。彼はフィロロジストを“rustic”「野暮な人間」に見立て、以下のように言い表している。

It too often resembles that rustic who, after listening for several hours to Cicero's most brilliant conversation, noticed nothing and remembered nothing but the wart on the great orator's nose. (Collins 66)

それは“that rustic”「野暮な人間、田舎者」に似ている、つまり「キケロの素晴らしい語りを聞いたとしても、その田舎者は、話し手の鼻についている〈いぼ〉しか記憶に留めていないような類の人々である」。コリンズは、些末な事柄に拘泥し作品が内包する道德観や精神的価値に無頓着であるフィロロジストの審美眼・文学的センスの欠如を揶揄している。この後も、科学の中でも“Philology is the most repugnant to men of artistic and literary tastes”（68）とし、容赦ない抗弁の調子が和らぐことはない。文学研究とフィロロジーの間にある深い溝が強調されていることは明白である。¹⁰

古典研究やヨーロッパ文学の援用による英文学研究推進を唱えたコリンズがフィロロジーを問題視するとき、そこにはルネサンス以前の言語文学への軽視が存在していたという指摘がある。Palmer はコリンズに対して、“Ignorance and prejudice could make him as dogmatic as any of his opponents, nowhere

more arrogantly than in his assumption that English literature began with the Renaissance” (86) とやや批判的に記し、自国の中世文学に対する彼の僻見を疑問視している。また、“Not only did he pour contempt on Anglo-Saxon and medieval literature as ‘the barbarous and semi-barbarous experiments of the infancy of civilisation’, he also identified the subject with the philological method of study to which it was then confined” (86) と続けているように、フィロロギーはルネサンス以前の古英語・中英語研究と緊密に結びつき、一種の等式関係が成り立っていたという経緯もあったことが窺えよう。「ニューボルト・レポート」においても、ドイツ式アプローチに訓練を受けた者の弊害として、比較言語学に立脚した各諸国語への関心、それは英語自体への関心でないこと、そしてチョーサー以後への興味が途切れていることが指摘されている (219)。¹¹ このように、大学への英文学の導入に際しては〈文学〉と〈フィロロギー〉のあり方を巡る活発な論争が存在し、言語研究に特化した後者を忌避しつつも、古英語や中英語は自国語文学のルーツとして必要不可欠であることが認識されていたのである。

3. トールキンと中世英語英文学研究

英文科ディシプリン形成の草創期、トールキンは学界を賑わす〈フィロロギー〉と〈文学研究〉の分断・乖離を嘆いていた一人であった。現に、はじめに見たように 1923 年の時点でトールキンは英文学研究の動向を“dark phantoms”と表現し、その不穏な状況を懸念していた。¹² ここで、1920 年代から 30 年代にかけてトールキンが執筆した主な学術論文を確認しておく。

1919-1920 Entries (some words beginning with W) for the *Oxford English Dictionary*

1922 *A Middle English Vocabulary*

1923 Review of Furnivall's EETS edition of *Hali Meidenhad*

1924 *The Year's Work in English Studies* 1923, “Philology: General Works”

1925 *Sir Gawain and the Green Knight* [Tolkien text and glossary; E. V. Gordon most of the notes]

1925 “Some Contributions to Middle English Lexicography”

1925 “The Devil's Coach-Horses”

- 1925 *The Year's Work in English Studies* 1924, "Philology: General Works"
 1927 *The Year's Work in English Studies* 1925, "Philology: General Works"
 1928 *Foreword to A New Glossary of the Dialect of the Huddersfield District* [5
 page introduction]
 1929 "Ancrene Wisse and Hali Meidhad"
 1930 "The Oxford English School"
 1932 "Sigelwara Land" [Part 1]
 1934 "Sigelwara Land" [Part 2]
1934 "Chaucer as a Philologist: *The Reeve's Tale*"
1936 "*Beowulf: The Monsters and the Critics*"¹³

1918年から1920年まで、*The Oxford English Dictionary*の編纂に携わっていた
 トールキンの初期の研究は、実に丹念で綿密な語彙研究が中心を占める。トール
 キンの最初の目覚ましい業績として何より、1925年に出版された中世アー
 サー王ロマンスの傑作『ガウェイン卿と緑の騎士』の校訂本が挙げられる。
 Tom Shippeyは、本校訂本に関して、「極めて成功した校訂本であり、それま
 でチョーサーやイングランド南部を拠点としていた中世英語研究の流れを変え
 るもの」だったと高く評価している（“*Gawain-poet*” 213）。本校訂本は、トール
 キンがオックスフォードで教授職を得るための決定打となったと言われてお
 り、彼の研究領域が語彙研究に留まらず、14世紀の文学思潮にある種塗り替
 えるほどの幅広い文学的・文化的視野を有していたことは指摘されるべきであ
 ろう。¹⁴ その意味では、『ホビット』を脱稿して刊行が決まった年に行われた
 “*Beowulf: The Monsters and the Critics*” 「ベーオウルフ——怪物と批評家」と
 題された講演にも触れておく必要がある。本英雄叙事詩を愛読したノーベル賞
 詩人 Seamus Heaney の “epoch-making paper” (xi) をはじめ、多くの研究者が
 本講演を『ベーオウルフ』研究を一新したターニング・ポイントとして捉え、
 今もなお色褪せることはない。¹⁵ 従来、『ベーオウルフ』は、ゲルマン民族の
 考古学の手引書や歴史的、言語学的資料として扱われる傾向があったが、トール
 キンは『ベーオウルフ』を純粋な詩として再考し、優れた構造とプロットを
 もつ芸術作品であるとした。そこには、北海を渡って英国に渡来したアングロ・
 サクソン人の民族的過去を憧憬の眼差しとともに回顧するベーオウルフ詩人の
 姿があり、トールキンは本作を「英雄的エレジー」として論じたのである。そ
 の主眼は紛れもなく『ベーオウルフ』を英詩として再考し、「文学的」評価を

与えることにあった。¹⁶

これらの金字塔的研究の陰にやや埋もれた感があるのは、14世紀の詩人ジェフリー・チョーサーに関連する“Chaucer as a Philologist”と題された論考である。これは1931年にフィロロジー協会での発表を基にしており、これは『カンタベリー物語』の中でも『莊園管理人の話』を全70頁にも渡り詳細に論究したものである。『莊園管理人の話』は、「ファブリオ」というフランスの文学ジャンルに属する物語の一つで、庶民の日常生活をベースとした滑稽譚である。しかし、他のファブリオと一線を画す最大の特徴として、登場する二人の学生の発話に現れる「北部方言」がある。これは英文学史上、方言が文学作品に使用された最初の例とされている。トールキンは、『カンタベリー物語』の初期の7写本を照合比較し、発話の方言を主に音声、語形変化、文法、語彙の観点から実に詳細に調査している。¹⁷

トールキンは、方言使用はファブリオの笑いを演出、助長する意図があったと結論づけている。彼はこの学生が話す北方方言に関して、豊富な用例を基にして初めて本格的な調査を行ったのである。劇的なリアリズム、“private philological curiosity”ゆえに、そして“pander to popular linguistic prejudices”するために北方方言を使用したと述べ、そこで共起する笑いを意図したと説明する(110-11)。とはいえ、注目したい箇所は、次の一節である。それは、「冗談を再現することが本稿の主旨ではない」という、実に興味深く意味深長な言葉である。

Merely to recapture some of the original fun would perhaps be worth the long and dusty labour necessary; but that will not be my chief object. Other points arise from a close study of Chaucer's little *tour de force*, so interesting that we may claim that it has acquired an accidental value, greater than its author intended, and surpassing the original slender jest. (Tolkien 3)

“that will not be my chief object”——すなわち、言語的的技巧に富む冗談を再現することがトールキンの論文における核心部分ではない。そうではなく別のところ、すなわち、作者チョーサーの意図をも越えた“accidental value”「偶然的価値」にある。“we”と括りを設けているように、これは会場にいる人々を極めて意識した発言となっている。この発言の真意は、その後の緻密な用例分析を跨いで、終盤に仄めかされている。

A great deal of pother may have been made over a few comic lines of his, yet we may feel sure he [Chaucer] would appreciate the attention, and have more sympathy with such pother, and with such of his later students who attach importance to the minutiae of language, and of his language, even to such dry things as rhymes and vowels, than with those who profess themselves disgusted with such inhumanity. (Tolkien 59)

発表を締めくくる最後の言葉はとりわけ強烈に響く。“[T]hose who profess themselves disgusted with such inhumanity”——「非人間性」とは何のことを表しているのか、そして「非人間的なものに嫌気がさしている、ウンザリしている人々」とは、どういう人々を指しているのか。「非人間性」とは、“such”とあるように、ここでは“such dry things as rhymes and vowels”を指す。「ウンザリしている人々」——これは英文学研究を推進する上で、先に見たようなコリンズに代表される反フィロロジー路線を訴えていた人々を思い出させる。ここにトールキンの真意が潜んでいる。すなわち、彼の究極の目的はチョーサーの評価というよりも、むしろ14世紀の詩人を通した「フィロロジー」そのものの価値の再評価、弁護に他ならない。その意味で、“Chaucer as a Philologist”と題されたこの論考は、実は“Tolkien as a Philologist”の裏返しであり、トールキンは論文を介してフィロロジーの有用性と研究射程の広がりを実証してみせているのである。概して、トールキンの研究者として類まれな力量が存分に発揮された面目躍如たるフィロロジストの業績と言えよう。

こうした観点でトールキンの論考を再考した場合、彼が『莊園管理人の話』を研究対象として取り上げた理由が何点か推察できる。例えば、先に見たように「方言のヴァリエーション研究」などは、フィロロジー研究の一つとして、英文学研究に含まれないことが提起されていた。方言に関して、「ニューボルト・レポート」は、“Attention should be given to the possibilities of dialect literature”と認めつつも、“not as a philological curiosity, but because dialect, where it still lives, is the natural speech of emotion, and therefore of poetry and drama” (275) とフィロロジカルな好奇心を否定し、詩や戯曲における有用性を説いている。これに対しトールキンは、豊富な方言の用例を緻密に検証することで、フィロロジストであるがゆえに解析できる文体上の技巧や効果、物語の妙味を提示してみせているのである。

さらに、『莊園管理人の話』の筋書きを考えてみた場合、興味深い事実が浮

かび上がる。とりわけ、「北部方言」を話す学生が最終的には悪事を働く粉屋を懲らしめるというストーリーに、トールキンは内心ほくそ笑むところがあったのではないか。14世紀のこの時期、とりわけ北部方言を巡って、「荒々しく粗野なイメージ」が定着していた。¹⁸しかし、本作においては、従来、否定的に見られていた北部のスピーチが一切嘲られることはない。登場人物は誰も方言に関して取り立てて言及しないし、学生の大敵であった粉屋のシムキンですら、学生の方言について悪態をつくことはない。¹⁹トールキンは『莊園管理人の話』における方言が従来の捉え方と一線を画すという点を強調している。

The evidence offered . . . is sufficient to establish the claim of the dialect of the northern clerks to be something quite different from conventional literary representations of rustic speech, tempered though it may have been to Chaucer's literary purpose, and superior to ignorant impressionism. (Tolkien 54)

先に見たように、フィロロジストは時に「野暮な人々、偏狭な堅物」に喩えられていることもあった。しかし『莊園管理人の話』においては、そうした「野暮ったい方言」を見事に操る北部出身の学生が、不正を働く悪者を出し抜く。「方言の使い手」である学生は、いわばフィロロジ陣営の隠れた「代弁者」であり、彼らが最終的に勝利するという結末に、トールキンは密かに小躍りし、心の中で快哉を叫んでいたに違いない。

そして何より、トールキンにとって喜ばしかったことは、ジェフリー・チョーサーという英国を代表する詩人が、当時イングランドの一辺境で話されていた方言にまで目を向け、それを生き生きと描き出したことではないだろうか。²⁰トールキン曰く、「チョーサーが再現した方言は“genuine” [本物である] —— 多くの人は方言を聞いて笑うことはできる、しかしそれを実際に記録・分析できるのはほんの僅かな人だけだ、そしてそれは、言葉に対する私的関心と好奇心があってこそ可能となる」(34)。当時、文学的なアプローチがなされることが少なかった古英語・中英語文学の中でも、チョーサーは例外的な地位を確立していた。²¹文学陣営も英詩の父チョーサーを敬愛し、文学的鑑賞の対象に含めていたのである。しかし、トールキンはチョーサーの言語理解に対して十分な検討が行われないまま、文学作品として語られることに違和感を禁じ得なかったようだ。文学研究対象のチョーサーは言語として括られると、突如まる

で「文学領域を脅かすグレンデル」のように人々には見られてしまうのだ。

Old English and Middle English literature, whatever its intrinsic merit or historical importance, becomes just 'language'. Except of course Chaucer. His merits as a major poet are too obvious to be obscured; though it was in fact Language, or Philology, that demonstrated, as only Language could, two things of the first literary importance: that he was not a fumbling beginner, but a master of metrical technique; and that he was an inheritor, a middle point and not a 'father'. Not to mention the labours of Language in rescuing much of his vocabulary and idiom from ignorance or misunderstanding. It is, however, in the backward dark of 'Anglo-Saxon' and 'Semi-Saxon' that Language, now reduced to the bogey *Lang*, is supposed to have his lair. Though alas! He may come down like Grendel from the moors to raid the 'literary' fields. He has (for instance) theories about puns and rhymes! (*The Monsters and the Critics and Other Essays* 234)

意外なことに、トールキンにとってチョーサーは必ずしも「英詩の父」を意味しない。むしろチョーサーこそ、近代文学と古英語・中英語文学の間を架橋する重要な詩人である。その意味で、チョーサーをグレンデルに見立てることは不本意であったかもしれないが、そうすることによって、敢えて英文学史の通時的・歴史的理解の重要性を説いているとも考えられる。

チョーサーは、〈フィロロジ〉と〈文学研究〉の狭間に位置する詩人だったとも言えるだろう。トールキンにとって、14世紀の詩人が一地方の方言に注目しただけでなく、厳密な音韻変化や文法、屈折語尾に至るまで、英文学研究として真摯に論じられることの少なかった側面に光を当てた詩人であったことは大いなる励ましとなったに違いない。同時に、そうしたチョーサー像は、文学陣営にフィロロジの存在意義を証明するための有効かつ説得力のある論拠となったことだろう。このように、稀代のフィロロジスト、トールキンは、〈言語〉と〈文学〉は決して別領域ではなく、互いが手を結ぶことによって実りある成果が期待できるという信念の下、当時の英文学研究論争に一石を投じたのである。

4. おわりに

トールキンは“Chaucer as a Philologist”の最後で、自分の言語分析を“A great deal of pother”「多数の些細な事」かもしれないと記した上で、チョーサー自身は“such pother”そうした些事=“the minutiae of language”に共感を覚えていたのではないかと結んでいる(59)。ここで二度用いられている“pother”という語彙は幾分目を引く言葉である。*OED*によると、語源は不明としつつ、おそらく“bother”の筆記上の誤りとしている。これは“p”と“b”の表記がとりわけ混同されたということがあった。さらに*OED*はこの語が“other”や“brother”といった語彙と脚韻を踏む語として、頻繁に使用されていることが分かる。“Other”と“Brother”——ここにトールキンの注意は向けられていないか。通常、気に留められないフィロロジカルな冗談として“pother”は“other”、すなわち、文学研究にとっては「他者」に映るかもしれない。しかしそれは「他者」でありながら“brother”[同士]でもある。この“pother”という言葉の選択に、英文学研究の未来に対するトールキンの隠された願望が込められているように思えてならない。そもそも、トールキンが英文科に立ち込める学術界の空気を“dark phantoms”と評するとき、それは〈言語〉と〈文学〉という区分がいかに恣意的で、「幻のようなもの」であるかを暗示しているようではないか。英文学研究とフィロロジの相克は一面では「幻影」にすぎない。なぜなら、フィロロジは言語だけに限定した無味乾燥な研究ではなく、それぞれ時代を生きた人間の心情や思想に迫り、文化の刻印を研究するもの——本質的に*OED*の一義にある“the branch of knowledge that deals with the historical, linguistic, interpretative, and critical aspects of literature”の究明であるからだ。何より、トールキンがその後物語作家として世界中の人々を魅了するとき、そこには一語一語の言葉に堆積する歴史や文化を尊ぶ文献学的眼差しと創造が欠かせなかった。

注

¹ “philology”の定義に関して、*OED*の語義を記しておく。*OED*, s. v. “philology,” n.

1. Love of learning and literature; the branch of knowledge that deals with the historical, linguistic, interpretative, and critical aspects of literature; literary or

classical scholarship. Now chiefly U.S.

†2. Chiefly *depreciative*. Love of talk or argument. *Obs.*

3. “The branch of knowledge that deals with the structure, historical development, and relationships of languages or language families; the historical study of the phonology and morphology of languages; historical linguistics. See also comparative philology at comparative adj. 1b.”

特にイギリスとアメリカでは語義に明らかな違い、温度差が見られる。この点に関しては小野（2000）、65-73 参照。

- ² “Mere reading, it turns out, prior to any theory, is able to transform critical discourse in a manner that would appear deeply subversive to those who think of the teaching of literature as a substitute for the teaching of theology, ethics, psychology, or intellectual history. Close reading accomplishes this often in spite of itself because it cannot fail to respond to structures of language which it is the more or less secret aim of literary teaching to keep hidden” (24). ド・マンの本論考を皮切りに、ここ 20 年にかけて “The Return to Philology” をタイトルとした論文が多く出されている事実は注目に値する。Lee Patterson, “The Return to Philology” (1994); Jonathan Culler, “The Return to Philology” (2002); Edward Said, “The Return to Philology” (2004); Geoffrey Galt Harpham, “Returning to Philology: The Past and Future of Literary Study” (2005); Martin G. Eisner, “The Return to Philology and the Future of Literary Criticism: Reading the Temporality of Literature in Auerbach, Benjaimin, and Dante” (2011)。フィロロギーへの注目の一理由として、Orlemanski は、“philology returns us to the messy, changeable relationship of our discipline to language. Its definitional heterogeneity calls for debate about how literary method ought to treat the logos around which scholarship circles” (174) としているが、フィロロギーの定義上の異類混交性こそが、そうした気運を高めているというのは興味深い。

- ³ 植民地インドの統治と文明化推進のため、英語の文学は重要な役割を果たした。現地の官吏「インド文官職 (India Civil Service)」の公開採用試験制度が本国イングランドに導入され、ロンドンで試験が実施された。また、日本における英文学研究の成立過程に関しては、宇佐美 95-96 参照。

- ⁴ 本論では、〈フィロロギー〉〈文学研究〉という区分を設けているが、〈文学研究〉内における様々な見方やアプローチの差異は当然考慮されねばならない。ま

た、オックスフォードとケンブリッジにおける〈文学研究〉といった場合も、通常、歴然たる違いが存在する両者の研究方針を一括りにすることはできない。この点に関しては石原（2012）、特に 410-17 に詳しい。また、リーヴィスの英文科構想に関しては石原（2013）、特に 36-41 参照。

- ⁵ Graff は、フィロロジが英文学研究より除外された理由を主に二つの観点から考察している。一つは、学部生の教育のニーズにフィロロジという専門性の高い科学研究が一致しなかったことで、事実上、その営みは “a nitpicking accumulation of linguistic minutiae on topics such as ‘The Passive Voice in Old Icelandic,’ with hardly any mention of the larger cultural implications” (1996, 16) であったとする。もう一つは、フィロロジと文学研究の関連における不透明性を挙げている。
- ⁶ 19 世紀に加熱した比較言語学 “Comparative Philology” が衰退した理由に関して、Shippey は “Probably the short answer is that the essence of comparative philology was slog” (*The Road to Middle-earth* 13) と推察している。
- ⁷ 英文学研究の成立に際して語られる安易なサクセス・ストーリーに対して、Atherton は、 “such interpretations fail to pay attention to the highly complex arguments that surrounded the subject’s entry into the universities” (221) とし、それ以前の英文学研究史への注意を喚起している。とりわけ、一連の議論において、英文学が大学に認可される際に決定的な役割を果たし、またその後の英文学研究が独立する際に三行半を突きつけられることとなる「フィロロジ」の議論が抜け落ちてしまっている感是否めない。例えば Eagleton の著においては、“philology” という言葉への言及は三度に留まり、詳細に語られることはない。25-26 参照。中英語研究の成立と英文学研究に関して、Matthews は “Medieval studies was one of the parents of English studies, but the ungrateful child was quick to run away from home” (*The Making of Middle English* 190) という興味深い言い方をしている。
- ⁸ “From the above retrospect it will be seen that the study of English language, in its earliest form of Anglo-Saxon, considerably preceded that of English literature in Oxford and Cambridge, and that from the Elizabethan period onwards there were intermittent endeavours to promote it. Those who were attracted to it were influenced by religious, literary or historical interests, and they did not pursue the subject on narrow and rigidly philological lines” (216). 特に 16 世紀から 17 世紀にかけての関心は、聖体の秘跡、自国語による聖

書翻訳といった宗教的な目的があり、“The linguistic aspect of the study was subordinate, and chiefly a means to an end” (215) であったことを確認している。

- ⁹ このような見解は特に *Study of English Literature* の4章 (“English Literature as a Subject of Academic Teaching: Distinction between Literature and Philology”) に提示されている。また、ケンブリッジの英文科創設の渦中にいた Tillyard は、コリンズの *Study of English Literature* などの著作が、1917年の英文学科誕生への一つの先駆けとなったと評価している (31-2)。
- ¹⁰ 後年、バーミンガムに移ったコリンズは古英語や中英語の文学作品を文学的観点から再考し、初期の英文学作品への見方も変化したとされる (Kearney 262)。英文学はその後、フィロロジーにも古典にも依存しない科目として確立するが、Kearney はコリンズを評価し、“Collins’ wide-ranging interests and enlightened approach to the teaching of literature, which appealed to thousands of university and extension students over the years, represented the healthiest attitude to English studies at the time and had a lasting benefit” (266) としている。
- ¹¹ “They approached their subject from the angle of Comparative Philology. Their main concern was not with English for itself, but in its relation to more or less allied groups of languages, and their interest in it usually stopped short abruptly after the Chaucerian period” (219).
- ¹² トールキンの学術業績における〈フィロロジー〉と〈文学研究〉の葛藤に関しては、Fitzgerald を参照。Fitzgerald は、“aspects of his attitude about Lit. and Lang. are still in need of a fuller explanation” (41) と述べているように、まだまだ研究の余地を残している。
- ¹³ Drout の “J. R. R. Tolkien’s Medieval Scholarship and its Significance.” における Appendix A より抜粋。
- ¹⁴ 本校訂本は、トールキンがリーズ大学で教鞭をとっていた頃、同僚の E.V. Gordon とともに手掛け、後にオックスフォードで教授職を得る際に決定的な功績となったと考えられている。菊池 234 参照。
- ¹⁵ 例えば、トールキンの名前を戴く「冠教授職」“J. R. R. Tolkien Professorship of English Literature and Language” (1980 年創設) に就任した Douglas Gray は、就任記念講演において “This lecture was certainly a turning-point in literary work on *Beowulf*, and has provoked discussion and debate ever since (22)”

と言及している。

¹⁶ 鶴岡 79-86 参照。また、唐澤 38-41 参照。

¹⁷ Anderson は、本論での優れた方言分析が例えば『ホビット』に登場するトロルの言葉遣いやキャラクター造形にも寄与していることに触れているが(70-71)、こうした学術的営みが後世の創作に与えた影響は今後、より掘り下げられるべきであろう。

¹⁸ チョーサーと同時代人のジョン・トレヴィサは、ラテン語から英語に翻訳した年代記の中で北部の言葉について言及し、中でもヨークの人の言葉は“scharp, slyttyng, and frotyng, and vnschape”「鋭く、かん高い、耳障りで不明瞭な」ゆえに、“we Souperon men may bat longage vnneþe vndurstonde”「我々南部の人間にはほとんど理解することができない」と記している。トールキンもこの点に触れつつ、そうした北部方言の特質が実際に例証されることはなかったことを指摘している(4)。

¹⁹ この点に関しては、Okamoto 5-6 参照。

²⁰ トールキンの論考を踏まえ、チョーサーの言語観とナショナル・アイデンティとの関連性を論じたものとして、菊池第二章、特に 49-56 参照。また、北部と南部方言の融合に論及したものとして、Okamoto。

²¹ 例えば、コリンズは英文科のカリキュラムを実現する上で、ラテン語文学は『アエネーイス』、フランス語文学は『ロランの歌』、そして英語文学はチョーサーで始まることが想定されねばならない、としている(64)。

参考文献

英文学研究／フィロロギー関連

Aarsleff, Hans. *The Study of Language in England, 1780-1860*. U of Minnesota Press, 1983.

Atherton, Carol. “The Organisation of Literary Knowledge: The Study of English in the Late Nineteenth Century.” *The Organisation of Knowledge in Victorian Britain*, edited by Martin Daunt. OUP, 2005, pp. 219-34.

Baldick, Chris. *The Social Mission of English Criticism, 1848-1932*. Oxford Clarendon P, 1983.

Barry, Peter. *Beginning Theory: An Introduction to Literary and Cultural Theory*. 2nd ed. Manchester UP, 2002.

- Benham, Allen R. "John Churton Collins—A Review." *Modern Language Notes*, vol. 24, no. 7, 1909, pp. 204-08.
- Board of Education, Great Britain. *The Teaching of English in England* ("The Newbolt Report"), 1921. <www.educationengland.org.uk/documents/newbolt/newbolt1921.html> Web. 11 Nov. 2016.
- Canter, Norman. *Inventing the Middle Ages: The Lives, Works, and Ideas of the Great Medievalists of the Twentieth Century*. Harper Perennial, 1993.
- Chambers, R. W. *Concerning Certain Great Teachers of the English Language*. Edward Arnold, 1923.
- Collins, John Churton. *The Study of English Literature: A Plea for Its Recognition and Organization at the Universities*. Macmillan, 1891.
- Cook, Albert. "The Province of English Philology." *PMLA*, vol. 13, no. 2, 1989, pp. 185-204.
- Court, Franklin, E. *Institutionalizing English Literature: The Culture and Politics of Literary Study, 1750-1900*. Stanford UP, 1992.
- Culler, Jonathan. "The Return to Philology." *Journal of Aesthetic Education*, vol. 36, no. 3, 2002, pp. 12-16.
- De Man, Paul. "The Return to Philology." *The Resistance to Theory, Theory and History of Literature*. U of Minnesota P, 1986, pp. 21-27.
- Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. Anniversary ed., Blackwell, 2008.
- Eagleton, Robert. *Doing English: A Guide for Literature Students*. 3rd ed., Routledge. 2002.
- Eisner, Martin G. "The Return to Philology and the Future of Literary Criticism: Reading the Temporality of Literature in Auerbach, Benjaimin, and Dante," *California Italian Studies*, vol. 2, no. 1, 2011, Web. <http://escholarship.org/uc/item/4gq644zp>.
- Engler, Balz. "Englishness and English Studies." *European English Studies: Contributions towards the History of a Discipline*, edited by Balz Engler and Renate Haas. The English Association, 2000, pp. 335-48.
- Gardner, Helen. "The Academic Study of English Literature." *The Critical Quarterly*, vol. 1, no. 2, 1959, pp. 106-115.
- Graff, Gerald. "Is There a Conversation in This Curriculum? Or, Coherence with-

- out Disciplinary." *English as a Discipline, or, Is There a Plot in This Play?* edited by James C. Raymond. U of Alabama P, 1996, pp. 11-28.
- . *Professing Literature: An Institutional History*. U of Chicago P, 1987.
- Gray, Douglas. *A Marriage of Mercury and Philology: An Inaugural Lecture delivered before the University of Oxford on 21 May 1981*. Oxford Clarendon, 1982.
- Gumbrecht, Hans Ulrich. *The Powers of Philology: Dynamics of Textual Scholarship*. U of Illinois P, 2003.
- Gupta, Suman. *Philology and Global English Studies: Retracing*. Palgrave Macmillan, 2015.
- Guy, Josephine M. "Specialisation and Social Utility: Disciplining English Studies." *The Organisation of Knowledge in Victorian Britain*, edited by Martin Daunton. OUP, 2005, pp. 199-217.
- Harpham, Geoffrey Galt. "Returning to philology: The Past and Future of Literary Study." *New Prospects in Literary Research*, edited by Geoffrey Galt Harpham, Ansgar Nünning, Koen Hilberdink. Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences Amsterdam, 2005, pp. 9-26.
- . "Roots, Races, and the Return to Philology." *Representations*, vol. 106, no. 1, Spring 2009, pp. 34-63.
- Hudson, Richard, and John Walmsley. "The English Patient: English Grammar and Teaching in the Twentieth Century." *Journal of Linguistics*, vol. 41, no. 3, 2005, pp. 593-622.
- Karato, Nobuyoshi. "Historical Sense and Regionalism in *The Return of the Native*: Thomas Hardy and the Philologist William Barnes." *The Bulletin of the Thomas Hardy Society of Japan*, no. 39, 2013, pp. 84-95.
- Kearney, Anthony. "John Churton Collins and the Attempt to Link English and Classics." *British Journal of Educational Studies*, vol. 29, no. 3, 1981, pp. 258-67.
- Lawrie, Alexandra. *The Beginnings of University English: Extramural Study, 1885-1910*. Palgrave Macmillan, 2014.
- Leerssen, Joep. "Philology and the European Construction of National Literatures." *European Studies*, vol. 26, 2008, pp. 13-27.
- Matthews, David. "From Mediaeval to Mediaevalism: A New Semantic History." *Review of English Studies*, vol. 62, no. 257, 2011, pp. 695-715.

- . *The Invention of Middle English: An Anthology of Primary Sources*. Brepols, 2000.
- . *The Making of Middle English, 1765-1910*. U of Minnesota P, 1999.
- . "What was Medievalism?: Medieval Studies, Medievalism, and Cultural Studies." *Medieval Cultural Studies: Essays in Honour of Stephen Knight*, edited by Ruth Evans, Helen Fulton and David Matthews. U of Wales P, 2006, pp. 9-22.
- McComiskey, Bruce. "Introduction." *English Studies: An Introduction to the Discipline(s)*, edited by Bruce McComiskey. National Council of Teachers of English, 2006, pp. 1-65.
- McMurtry, Jo. *English Language, English Literature: The Creation of an Academic Discipline*. Mansell, 1985.
- Momma, Haruko. *From Philology to English Studies: Language and Culture in the Nineteenth Century*. Cambridge UP, 2013.
- Orlemanski, Julie. "Philology and the Turn Away from the Linguistic Turn." *Florilegium*, vol. 32, 2015, pp. 157-81.
- Palmer, D. J. *The Rise of English Studies: An Account of the Study of English Language and Literature from its Origins to the Making of the Oxford English School*. OUP, 1965.
- Patterson, Lee. "The Return to Philology" *The Past and Future of Medieval Studies*, edited by John Van Engen. U of Notre Dame P, 1994, pp. 231-44.
- Pollock, Sheldon. "Future Philology? The Fate of a Soft Science in a Hard World." *The Fate of the Disciplines*, edited by James Chandler and Arnold Davidson. *Critical Inquiry*, vol. 35, no. 4, 2009, pp. 931-61.
- Potter, Stephen. *The Muse in Chains*. Jonathan Cape, 1937.
- Said, Edward. "The Return to Philology." *Humanism and Democratic Criticism*. New York, 2004, pp. 57-84.
- Tillyard, E. M. W. *The Muse Unchained: An Intimate Account of the Revolution in English Studies at Cambridge*. Bowes & Bowes, 1958.

J. R. R. トールキン関連

- Anderson, Douglas A., editor. *The Annotated Hobbit: Revised and Enlarged Edition*. Houghton Mifflin, 2003.
- Drout, Michael D. C., editor. *J.R.R. Tolkien Encyclopedia: Scholarship and Critical*

- Assessment*. Routledge, 2006.
- . “J. R. R. Tolkien’s Medieval Scholarship and its Significance.” *Tolkien Studies*, vol. 4, 2007, pp. 113-76.
- Fitzgerald, Jill. “A ‘Clerkes Complainte’: Tolkien and the Division of Lit. and Lang.” *Tolkien Studies*, vol. 6, 2009, pp. 41-57.
- Heaney, Seamus. *Beowulf: A New Verse Translation*. Farrar, Straus and Giroux, 2000.
- Honegger, Thomas. “Academic Writings.” *A Companion to J.R.R. Tolkien*, edited by Stuart D. Lee. Wiley Blackwell, 2014, pp. 27-40.
- Horobin, Simon. “J. R. R. Tolkien as a Philologist: A Reconsideration of the Northernisms in Chaucer’s *Reeve’s Tale*.” *English Studies*, vol. 82, no. 2, 2001, pp. 97-105.
- Okamoto, Hiroki. “‘Curious fact’: Fading of Northernisms in *The Reeve’s Tale*.” *Bulletin of the Society for Chaucer Studies*, vol. 5, 2017, pp. 3-21.
- Scase, Wendy. “Tolkien, Philology, and *The Reeve’s Tale*: Towards the Cultural Move in Middle English Studies.” *Studies in the Age of Chaucer*, vol. 24, 2002, pp. 325-34.
- Scull, Christina and Wayne G. Hammond, editors. *The J.R.R. Tolkien Companion and Guide: Chronology*. Vol. 1. Houghton Mifflin, 2006.
- . *The J.R.R. Tolkien Companion and Guide: Reader’s Guide*. Vol. 2. Houghton Mifflin, 2006.
- Seaman, Gerald. “*Sir Gawain and the Green Knight*: Edition with E. V. Gordon.” Drout, pp. 615-17.
- Shippey, Tom. *J. R. R. Tolkien: Author of the Century*. Harper Collins, 2001.
- . *The Road to Middle-earth*. Revised edition, Houghton Mifflin, 2005.
- . “Tolkien as Editor.” *A Companion to J.R.R. Tolkien*, edited by Stuart D. Lee. Wiley Blackwell, 2014, pp. 41-55.
- Tolkien, J.R.R. “Chaucer as a Philologist: The Reeve’s Tale.” *Transactions of the Philological Society*, 1934, pp. 1-70.
- . “Foreword.” *A New Glossary of the Dialect of the Huddersfield District*, edited by Walter E. Haigh. OUP, 1928.
- . *A Middle English Vocabulary*. Clarendon P, 1922.
- . *The Monsters and the Critics and Other Essays*, edited by Christopher Tolkien.

George Allen & Unwin, 1983.

- . “Philology: General Works.” *The Year’s Work of English Studies*, vol. 4, 1923, pp. 20-37.
 - . “Philology: General Works.” *The Year’s Work in English Studies*, vol. 5, 1925, pp. 26-65.
 - . “Philology: General Works.” *The Year’s Work in English Studies*, vol. 6, 1927, pp. 32-66.
 - . “Some Contributions to Middle English Lexicography.” *Review of English Studies*, vol. 1, no. 2, April 1925, pp. 210-15.
- Tolkien, J. R. R., and E. V. Gordon, editors. *Sir Gawain and the Green Knight*, 2nd edition, rev. Norman Davis. Oxford Clarendon P, 1967.
- Tolkien, J. R. R., Humphrey Carpenter, and Christopher Tolkien. *The Letters of J.R.R. Tolkien*. Houghton Mifflin, 1981.

日本語文献

- 網代敦. 「イギリスの文献学（フィロロジ）と文献学者（フィロロジスト）—その3」『大東文化大学英米文学論叢』第34巻, 2003, 11-39頁.
- 石原浩澄. 「「ロレンスとリーヴィス」再考—ロレンス研究誕生の風景点描」『ロレンスへの旅』松柏社, 2012, 397-421頁.
- . 「リーヴィスと英文学部の理想」『ことばとそのひろがり』(立命館法学別冊) 2013, 29-55頁.
- 伊藤盡. 「トールキンのファンタジー：想像力の源泉としての中世英語・北欧語文献学」『探究するファンタジー：神話からメアリー・ポピンズまで』成蹊大学文学部学会編, 風間書房, 2010年, 181-225頁.
- 宇佐見太市. 「日本の英文学研究考」『関西大学外国語学部紀要』第9号, 2013, 95-116頁.
- 岡本広毅. 「‘trusteth wel, I am a southren man’: チョーサーと「荘園管理人の話」におけるイングランド北部」『英米文学』立教大学英米文学専修紀要, 第71号, 2011, 35-61頁.
- 小川浩. 「英語学と言語学の狭間—フィロロジの立場から—」『英語青年』第147号, 2001, 29-31頁.
- 小野茂. 『フィロロジスト：言葉・歴史・テキスト』南雲堂, 2000.
- . 『フィロロジのすすめ』開文社出版, 2003.

- 一、『歴史の中の英語』南雲堂，2008.
- 唐澤一友，「中世文学の世界とファンタジー『ベオウルフ』とトルキンの場合」『想像力と英文学—ファンタジーの源流を求めて』サウンディングズ英語英米文学会編，小林章夫監修，金星堂，2007，30-51 頁.
- 菊池清明，『中世英語英文学 I—その言語と文化の特質—』春風社，2015.
- 武内信一，『英語文化史を知るための 15 章』研究社，2009.
- 鶴岡真弓，「『ベオウルフ』と怪物」『ユリイカ』[特集トルキン生誕百年—モダン・ファンタジーの王国] 第 24 巻，第 7 号，1992，76-86 頁.
- バーチェフスキー，ステファニー・L. 『大英帝国の伝説：アーサー王とロビン・フッド』野崎嘉信，山本洋訳，法政大学出版局，2005.
- 舟川一彦，『英文科の教養と無秩序：人文的知性の過去・現在・「未来？」』英宝社，2012.
- 宮川敏春，『英国人らしさの理想と教育：ヴィクトリア朝期の訓育と母国語教育を中心に』日本図書刊行会，1997.
- 宮崎裕助，「文献学への新たな回帰？」『現代思想』第 43 巻，第 11 号，2015，214-22 頁.
- 山田泰司，「語学と文学との間」『一橋論叢』第 61 巻，第 4 号，1969，472-86 頁.
- 吉野利弘，「中世英語英文学の誕生 I—Philology とアングロ・サクソン学—」『言語の普遍と変容』Anglo-Saxon 語の継承と変容叢書 2，専修大学大学院社会知性開発研究センター / 言語・文化研究センター，2007，143-64 頁.